ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「お……おはよう……」

「おはよう、雅也。どうしたの？」

　入学式から二日後。息を切らせて教室に入ってきた雅也に、神楽は首を傾げて尋ねる。今は、朝学活が始まる二分前だ。

「い……いや、道に迷っちゃってさ。走ってきた……」

「昨日は、ちゃんと迷わずに来れたじゃないか」

　やれやれと呆れたように言う神楽。雅也は、ランドセルを机の脇に掛け、椅子に座ってそのまま突っ伏す。

「いや、実はさ、昨日は『テレポートサービス』を使ったんだよね」

「なるほど、入学式の日みたいに？」

「ちょ……思い出させないでよ！　昨日は、なるべく人のいない所にテレポートしてもらったんだ。でも、三日続けてはちょっと……」

「ははは、なるほどね」

　二人がそんな事を話していると、先生が教室に入ってきたので、慌ててお喋りを止める。それでも話したいことがまだあるようで、二人は先生に見えないように、小さな紙切れで筆談を始める。傍から見れば、二人は仲のいい友達に見えるだろう。

　そう。全ては雅也の考えすぎだったのだ。

　何者なのだろうと考えたものの、話してみると、神楽は中々に気さくな人物で、趣味はポケモンバトルだとか。雅也自身もポケモンバトルは好きなので、そっち方面の話で二人は盛り上がり、気づけば、学校生活三日目でこんな感じだ。いつしか雅也は、神楽が何者なのかなんて、どうでも良くなっていた。

　そして四月は、何事もなく過ぎていく……